年史編纂室所蔵写真・資料に見る戦後の第1学舎の建物群

――関西大学第1次拡充5カ年計画を中心に――

橋寺知子

はじめに

第1学舎エリアは、千里山キャンパスで最も長い歴史をもつエリアである。『学の実化　大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』[1]において、1922年の予科校舎の竣工時から戦前期までの校舎の変遷を述べた。戦後、第1学舎は1955年に創立70周年記念事業として整備され、大きく姿を変えた。戦後の千里山キャンパスの校舎等の設計は、建築家・村野藤吾が多くを担っており、第1学舎は村野にとっても代表作の一つとして、作品集等でもよく掲載される。この時期の校舎群を母校の姿として記憶する卒業生も多いだろう。本稿では、年史編纂室が所蔵する写真・資料から、創立70周年事業として整備された第1学舎の校舎群の変遷と特色をみる。

1．戦前期の第1学舎

1922年に予科校舎が建設され、千里山キャンパスのあゆみが始まった。千里山への移転は、大学への昇格を目指したもので、予科校舎だけでなく、本館や講堂、図書館等も同時に計画され、1922年の専門部卒業アルバムには幻の新校舎設計図が掲載されていた[2]。

本館の建設は急務で、住友総本店から社屋を譲り受け、移築改修し、隅部に八角形の塔をもつ洋館の建物は、初期の千里山キャンパスを代表する景観の一つである。

図書館という施設は大学にとって象徴的な意味をもつ。念願の図書館は、千里山キャンパス初の鉄筋鉄骨コンクリート造で、1927年6月5日に起工し、翌年竣工した。現在の簡文館の一部である。外観は白色モルタルで、柱部分には尖塔型のピラスターが配され、垂直性が強調されたゴシック様式の装飾が見られる。

講堂として使用できる部屋は大学本館2階にあったが、学生数を考えると、大勢が集う式典を行うには手狭だったと思える。1928年に昭和天皇の即位の大礼が京都で挙行された。その際に京都御所に建設された饗宴場の一部が関西大学に下賜され、講堂兼武道場である「大礼記念館」が1932年に竣工した。建築面積は約600㎡、緩やかな反りのある入母屋造の屋根が目立つ近代和風建築であった。威徳館

と呼ばれ、剣道・柔道場として使われるとともに、入学式・卒業式等の式典にも使われた。

戦前期の第1学舎は、グラウンドから北方を眺めると、法文坂途中にクラブハウス、予科校舎、大学本館、図書館が高台に建ち並び、本館北側に威徳館が垣間見える、そんな景観を呈していた（図1）。

2. 村野藤吾による第1学舎の建設

戦後、1948年に関西大学は新制大学への移行を果たし、大学院の充実が望まれた。戦前に整備された第1学舎の諸施設は木造が多く、建設から30年程度経過していた。今後求められる規模・設備を考え、全面的な建替えが選択されたと想像できる。この施設整備に登用されたのが、建築家・村野藤吾である。村野藤吾は日本の近現代建築を代表する建築家の一人である。大阪に事務所を構え、そごう大阪店や大庄村役場（尼崎）、志摩観光ホテルなど、さまざまな種別の建築設計に携わっていた[3]。登用に至った経緯ははっきりしないが、村野藤吾も関西大学も、関西の経済界との結びつきが強く、その縁で設計を担当したのではないかと思える。

村野が千里山キャンパスで最初に手掛けたのは、旧予科校舎の跡地への大学院学舎、大学ホールの建設である。大学院学舎は1949年に竣工した。木造2階建てで赤いフレンチ瓦葺、中央に3連アーチの玄関をもつ、かわいらしさのある建物であった。続いて1952年に研究室、階段教室、大学ホールが建設される。庭の北面に大学院学舎、西側には研究室棟、南面に大学ホールが連なり、庭をコの字型に囲んでいた。比較的小規模な校舎群は、落ち着きのある「学園」の雰囲気を持っていた。

1952年から1955年にかけて、関西大学拡充5カ年計画の一環として、第1学舎（法文学舎）の整備が実施された。大学院学舎エリアとは収容する人数や教室の大きさも全く違う設計条件であった。こじんまりした「学園」ではなく、大人数に対応できる規模の空間が創出された。大学施設の更新は、授業を継続しつつ、同時に建設する必要があり、第1学舎の建替えも、戦前期の建物を使いながら段階的に建設された。1955年に作成された『関西大学拡充計画完成記念』と題されたパンフレットによると、第1学舎は3期に分けて建設されたことがわかる（図2）。まず建設されたのは、威徳館の両側

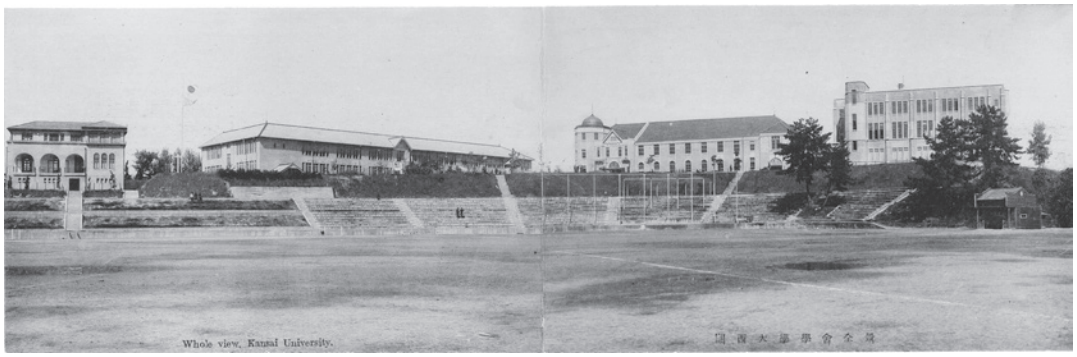

図1　昭和初期の第1学舎エリア

左からクラブハウス、予科校舎、大学本館、図書館。南面のグラウンドは東洋第一の大運動場と称された。

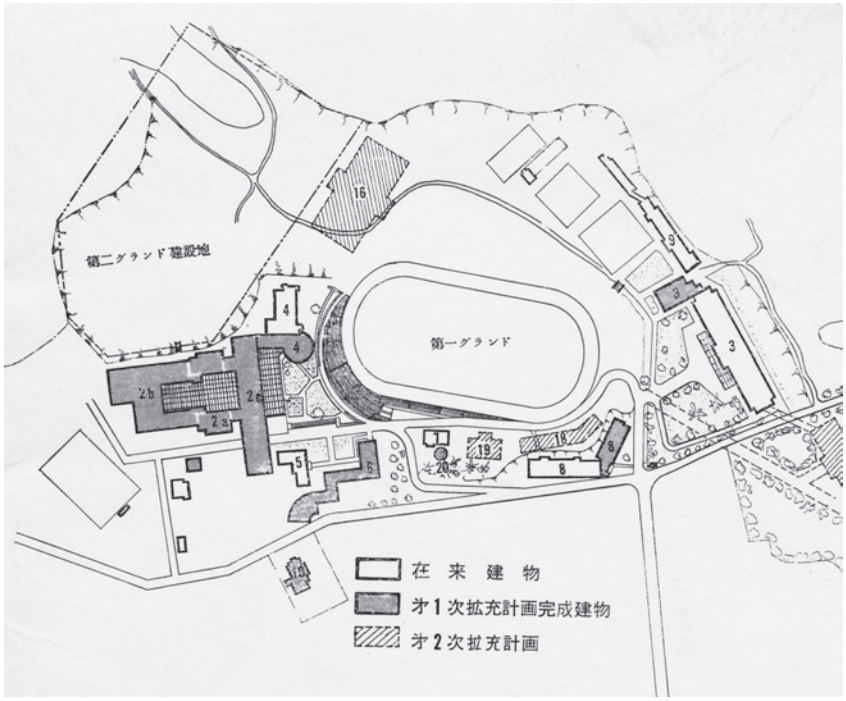

図２　1955年の第１学舎配置図
２ａが１期、２ｂが２期、２ｃが３期工事である。

部分である。図3を見ると、威徳館のすぐ傍に新校舎が建っている様子がわかる。その後、威徳館が解体され[4]、続いて両側の新築校舎をつなぐように北側にコの字型の校舎を建設し、中庭を囲む形の学舎となった（図4）。つまり、中庭が威徳館の跡地にあたる。1期・2期工事で完成した部分は、地上2階・地下1階と記されているが、北部ほど地盤面が低くなっているため、地下といっても地中にはなっておらず、法文坂に続く通路に地階は接している。地階には、大きめの教室が二つ設けられた（図5）。1階は、中庭を囲むように廊下が配され、中規模・小規模の教室が並ぶ。2階北東部には2層吹抜けの講堂が設けられている。年史編纂室が所蔵する写真資料では、講堂の内外を撮影したものが多く残されている。南側廊下は少し広めに取られ、図面にはホールと記され、講堂利用時の客溜りの役割を果たす（図6）。講堂北面中央には簡素な演台が設けられ、竣工時と思われる写真では、客席として机も備えた折り畳み式の椅子が設置されている[5]。両側には縦長の窓が並び、明るい空間と感じられる。高い位置から撮影した写真を見ると、海外の大学のオーディトリアムのような落ち着きが感じられる（図7、8）。創立70周年の記念式典は、この新しい講堂で挙行された。講堂の北面には、両側に扉があり、外部階段が設けられている（図9）。大人数が収容される講堂からの避難を考えると必要な階段であり、また中庭がある1階は、北面では地盤面より高い位置にあるので、1階からの出入口もつないだ設計となっている。屹立する平板に階段が回る、直線的な意匠だが、北面の外観意匠の重要な要素となっている。

最後に3期工事として、中庭南側に東西方向に長い校舎が建設され

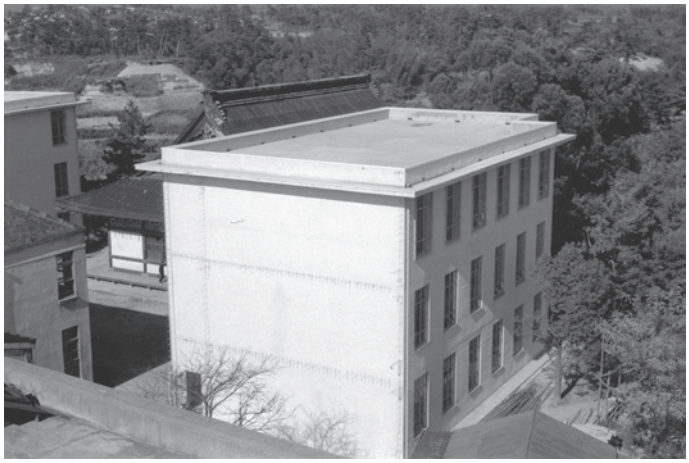

図３　第１学舎１期工事完成
威徳館と新校舎が併存する。新校舎の窓は３層とも同じに見えるが、最上階のみ枠を少し突出させ、変化をつけている。

図４　第１学舎２期工事完成
中庭側には縦長の窓が整然と並び、頂部には庇がつき、クラシックな印象を与える。

図５　第１学舎２期工事北西部
斜めに配された縦ルーバーの奥に地階の教室がある。

図6　第1学舎2階講堂前ホール
中庭に面する窓から光が差し込む。

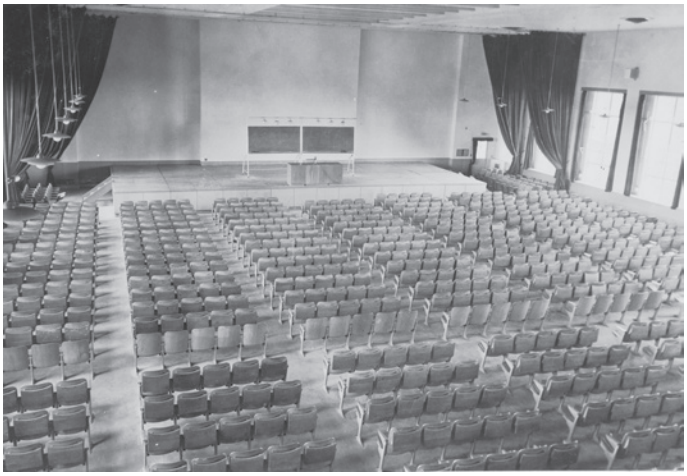

図7　第1学舎2階講堂内部
劇場のような形式の椅子が並ぶ。

図8　第1学舎2階講堂
後方には2階席、映写室等が設けられた。

た（図10）。この時点までに、大学本館が解体された（図11）。法文坂からの通路を跨ぐように建つ地上2階地下1階の建物で、西側は大学院学舎に近接し、また東では戦前期に建設された図書館に円形の閲覧室と書庫を増築し、新校舎と一体になるよう計画された（図12）。中庭正面には中央入口（ピロティ）が設けられ、第1学舎のハブとなっている。2層吹抜けのピロティ内には、ユニークな柱脚で支えられたスロープが配され、上階への主要なルートとなっている（図13）。ピロティは中庭へのゲートのようでもあり、視覚的には額縁の役割を果たしている（図14）。中庭には十文字に通路が通されているが、初期には

図9　第1学舎北面外観

講堂北面の両側に出入口が設けられ、外部階段に接続される。2階に見える部分が、中庭のある1階にあたる。敷地の高低差を織り込んだ複雑な階段。

図10　第1学舎3期工事

2期完成部分から南を望む。鉄筋コンクリート造の型枠や最上階屋根の鉄骨の骨組みが見える。

図11　大学本館の解体

2期工事部分にまだ足場がかかっており、2期工事終盤、本館解体初期の写真と判断できる。本館隅部の塔は記念館として移築保存する案もあり、しばらく部材が保管された。

図13　第１学舎中央出入口スロープ

３期工事竣工式時の写真か。村野藤吾がスロープの手前踊り場付近に見える。二手に分かれてスロープを支える柱脚が造形の要素となっている。

図12　第１学舎３期工事竣工

法文坂に続く通路から幅広の斜路を上ると中央出入口（ピロティ）へ導かれる。校舎南面にはバルコニーが付され、白いスラブで水平線が強調される。

図14　第１学舎中庭

柳の並木と芝生がユニークである。

図15　1970年代の中庭

中央に円形の植え込みがあり、十文字の通路が強調された。

ピロティから北に向かって両側に柳の並木が配されていた。[6] 矩形の中庭を校舎で囲む配置は、西洋の学校建築の定番だが、中庭に柳の並木はユニークな取り合わせである。その後、１９７０年頃の写真では、中庭中央に円形の植え込みがあり十文字の通路が強調されている（図15）。中庭といえば、緑濃い風景を思い出す人の方が多いかもしれない。

３期部分１階西側には事務室、１階東側と２階には大教室が配された。２階南面には外部通路がバルコニーのように付され、外観は水平線が強調されている（図16）。壁の上部は窓、下部はレンガタイル貼り、柱梁部分は白

図17　第１学舎　大教室

両側は大きな窓で開放的で明るい。

図18　第１学舎１号館

法文坂から続く通路から北を望む。すでに２号館が奥に見えるので、1970年頃の撮影か。１号館によって視線は少し遮られるが、奥の気配は感じられる。

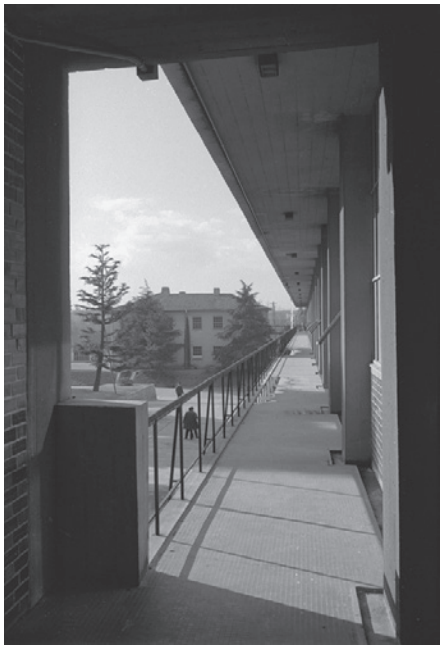

図16　第１学舎２階南面外部通路（バルコニー）

バルコニーの床と庇の水平線が印象的である。手すりは最小限の部材で構成され、目立たない。

色で仕上げられ、円形のフォルムが特徴的な図書館（現・簡文館）の壁面デザインと調和している。大教室の平面はかなり細長く、両側に大きく開口部が取られている。昼間、採光が十分なら照明設備を使わず授業していた時代であり、今とは教室に求められる空間条件が異なるが、明るく開放的な講義室だったと思える（図17）。

図18にある通り、正門から坂を上り切った所で見える風景は、長い校舎で少し遮られる。この手前を右へ、幅広の斜路を上がれば中央入口（ピロティ）に導かれる。また校舎の下部の少し暗いトンネルのような空間をくぐれば、少し雰囲気が変わり、さらに奥へ続く。創立70周年の１９５５年には、第１学舎新校舎より北側は、テニスコートなどがあるだけだったが、その後順次、法文研究室棟や第１学舎２号館、３号館が建設された。法文研究室棟は主に教員の研究個室から成る建物である（図19）。片側廊下に研究個室が並ぶ、赤褐色の煉瓦タイル貼りの矩形建物で、簡素な意匠だが接地部や窓周りは繊細にデザインされている。この建物から教室棟へ、通路を跨いで接続されていた。第１学舎エリアは、キャンパス内では一番標高の高い位置にまとまり、エリア内に急激な高低差はないが、微妙な地形の変化が見られる。スロープや階段で、少しずつ上下させて繋ぎ、またひと繋ぎの建物でもいくつかの部分に分けて雁行させ、細やかな空間を作っている。

図19　法文研究室棟

通路は１層分低い位置にあるが、研究室棟の地盤は１号館１階と同じぐらいの高さである。接地部の壁面は少し奥まっていて、地面との強い衝突を避ける。窓を開けている室がいくつか見られ、押出窓だったことがわかる。

図20　第１学舎２号館

赤褐色の小口タイル貼りで、１階正面は角柱が並びアーケードになっている。

3．創立70周年以降の第1学舎整備

第1学舎エリアの最北部にある第1学舎2号館（大中教室棟）は、1967年に竣工し、現在も使われている（図20）。1955年頃の建物はコンクリートの柱梁のフレームに壁面は煉瓦タイル貼りという壁面構成が主になっていたが、2号館は正方形の小さなタイルを張り詰めた外観意匠で、デザインの基調は異なるが、色彩は赤褐色で合わせている。1階正面は角柱が並ぶアーケード状の空間で、中央に幅広の直進階段があり、各階、両側に大教室が配された単純明快な平面の建物である。教室が大きいほど、短い休み時間に移動する人数は多いので、単純な動線計画は、それに考慮したものと思える。階段の意匠は至ってシンプルだが、京都工芸繊維大学が所蔵する村野の設計図面を見ると、この階段のためのスケッチが多く残されている。

おわりに

2024年は文学部創設100年である。第1学舎は、村野藤吾が関わり始めた頃は「法文学舎」と称され、千里山キャンパスの象徴的な景観が集積する場所であった。草創期の風景を5年ほどで一変させた村野藤吾設計の第1学舎は、明るく輝き、関西大学の新時代を象徴するものでもあっただろう（図21）。学内の風景を記録する写真からは、大学の変化だけでなく、何を記録し伝えたかったのかを読むこともできる。今回取り上げた建物は、すでに建て替えられたものが多いが、学生時代を過ごした場所として記憶する人はまだ多い。2階建ての長い校舎、広い教室、円形の図書館、中庭、ちょっと変わった階段・スロープなど、思い出

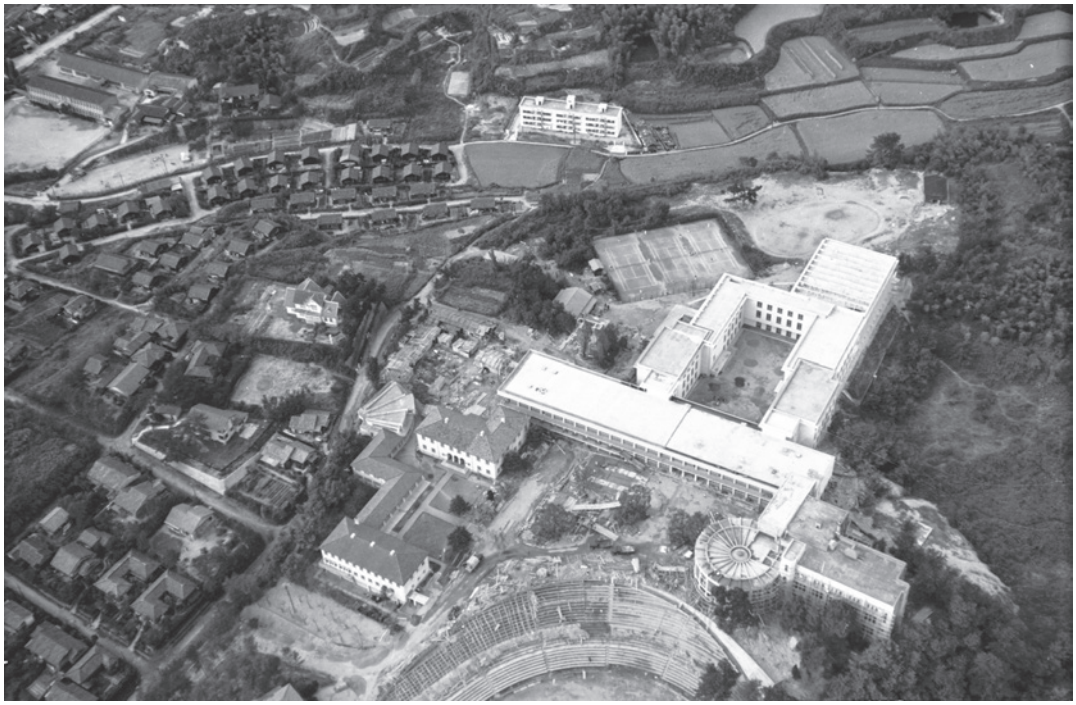

図21　1955年の第１学舎
新校舎の前庭や３期工事西部はまだ工事中。

の場所はそれぞれ異なるだろう。現在、第1学舎といえば、広い芝生のあすかの庭とその背後に建つ現在の1号館（２００８年竣工）を思い浮かべる学生が多い。キャンパスの建物や景観は、そこで過ごした人々の記憶のよりどころでもある。

注

（1）関西大学年史編纂委員会編：『学の実化　大学昇格・千里山学舎開設１００年記念誌』、関西大学、２０２２年

（2）同上書、１８３ページ

（3）村野藤吾は大学院学舎をはじめとし、１９８０年まで約30年、千里山キャンパスのデザインに関わり続けた。村野は日本全国で多数の作品があるが、一つの場所にこれほど長く関わり続けた事例はそう多くない。

（4）威徳館は、現在、千里山西の千里寺本堂として利活用されている。

（5）講堂内部の什器は、その後固定型の長机に変更されている。改修時期ははっきりしないが、１９６３年に新体育館が完成し、大規模な式典はそちらが使われるようになり、日々の講義に使う大教室へ変更されたと考えられる。

（6）中庭の整備時期ははっきりしない。3期工事完成までは、資材置き場や作業場として使われていたと考えられる。3期工事の竣工式典は中庭にテントを設営して挙行されたようで、当時の航空写真を見ても、地面のままである。

（はしてら・ともこ　関西大学環境都市工学部）